異文化コミュニケーションにおける あいさつ言語行動の研究

于亮 苏娜 著

辽宁民族出版社

異文化コミュニケーションにおける あいさつ言語行動の研究

于亮 苏娜 著

辽宁民族出版社

阜阳师范大学图书馆 藏书

© 于亮，苏娜 2016

图书在版编目（CIP）数据

日语寒暄语言行为研究 / 于亮，苏娜著. —沈阳：辽宁民族出版社，2016.3

ISBN 978-7-5497-1275-5

Ⅰ. ①日… Ⅱ. ①于… ②苏… Ⅲ. ①日语—口语—研究 Ⅳ. ①H369.9

中国版本图书馆CIP数据核字（2016）第038096号

日语寒暄语言行为研究

RIYUHANXUAN YUYANXINGWEIYANJIU

出版发行者：辽宁民族出版社
地　　址：沈阳市和平区十一纬路25号　邮编：110003
印 刷 者：辽宁票据印务有限公司
幅 面 尺 寸：170mm×240mm
印　　张：16
字　　数：300千字
出 版 时 间：2016年3月第1版
印 刷 时 间：2016年3月第1次印刷
责 任 编 辑：金顺玉
封 面 设 计：杜　江
责 任 校 对：代智敏

标准书号：ISBN 978-7-5497-1275-5
定　　价：45.00元

法律顾问：陈　光　　举报电话：024-23284336
版权专有　侵权必究　　邮购电话：024-23284335
如有印装质量问题，请与出版社联系调换　　联系电话：024-23284340
网　　址：www.lnmzcbs.com　　淘宝网店：http://lnmz2013.taobao.com

まえがき

コミュニケーションは、人間生活にとって不可欠である。それは社会の紐帯であって、それなくしては人間社会も人間の生活自体も成り立たない。文化とコミュニケーションは同じではないが、不可分である。だからどのような人間コミュニケーションも、文化の影響から逃がれられない。

21世紀は異文化間のコミュニケーションの時代と言われ、語学教育では、異文化間コミュニケーション能力の開発が要求されてきて、言語の実際運用能力を習得することに目標を置いている。円滑な異文化間コミュニケーションを営むため、伝達手段としての日本語を適切に使える文法能力が求められるが、そのコミュニケーションの背景となる社会的場面での適切な理解と行動も同時に求められている。

「あいさつ」はコミュニケーションの第一歩として、もっとも基本的、代表的なものである。日本社会、日本文化への理解を深化し、日本人とのコミュニケーションのコツを把握するために、日本の「あいさつ」を徹底的に究明し、同時に他国と比較しながらまとめなければならないと考えられる。

本書はあいさつを大衆文化の一部であるテレビドラマを通して観察、分析する。コミュニケーションのあり方にテレビがかなりの影響力を持っている。特にテレビドラマはその映像と音声の両方が、人間の触れ合いの場面を描くものであり、その影響力には計り知れないものがある。テレビドラマの言葉は日常の言葉の特徴を反映していると同時に、日常の言葉にかなり影響を与えていると言えよう。

本書は三つの部分がある。まず、序章では基本理論を述べる。それから日常生活における日本語あいさつ言葉の使用実態、特徴、反映する日本文化について論じる。最後に、中日両国における詫びという言語行為の使用実態や類似点・相違点について論じる。執筆の分担は、どの部分も著者2名

の意見や考察が大なり小なり入っている共同執筆であるが、特に序章、第一部分（約22万字）は于亮、第二部分（約8万字）は苏娜の責任執筆となっている。

また、本書は科学研究費補助金“基于寒暄的中日对比立体语境习得平台研究”（上海外语教育出版社 全国高校外语教学科研项目）、“基于视频语料库的中日寒暄语言行为对比研究-以场景划分”（中央高校基本科研业务费）、“汉日道歉言语行为策略的对比研究”（大连外国语大学科研基金立项项目）の研究成果の一部である。

研究者諸氏からの忌憚ないご批正を仰ぎたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目录

序　章 ……001

第一節　研究意義……001
第二節　本書の構成……002
第三節　テーマ選定の理由……003
第四節　コミュニケーションと文化……004
第五節　異文化コミュニケーション……009
第六節　あいさつの定義……011
第七節　あいさつの動機と機能……012
第八節　あいさつの分類……014
第九節　テレビドラマを利用する理由……016

第一部分　あいさつ言葉の使用実態と特徴 ……019

第一章　先行研究……021
第一節　八十年代までの代表的な研究……021
第二節　八十年代の代表的な研究……022
第三節　九十年代以降の代表的な研究……026
第四節　分野別にまとめた研究……029
第五節　対照研究……042
第六節　まとめ……046
第二章　研究対象……048
第一節　研究の位置づけ……048
第二節　日本人のあいさつ観……049
第三節　研究対象の範囲……051
第四節　データ収集方法……052
第五節　研究資料について……053
第六節　あいさつ言葉の今までの分類……057

第七節　本文での分類……058
第八節　分析のための視点……059
第三章　あいさつ言葉の使用実態……062
第一節　人に出会った時……062
第二節　別れる時……068
第三節　家を出入りする時……074
第四節　お礼を言う時……075
第五節　お詫びをする時……078
第六節　依頼をする時……081
第七節　慰労をする時……082
第八節　訪問をする時……084
第九節　寝る前……086
第十節　食事をする前後……087
第十一節　慶弔をする時……096
第十二節　呼びかける時……097
第十三節　商業用語……097
第四章　あいさつ言葉の特徴及びその文化背景……099
第一節　文化とあいさつ……099
第二節　お詫びのあいさつ言葉がたくさん使われる……100
第三節　家を出入りする時のあいさつ言葉の使用頻度が高い……105
第四節　命令形のあいさつ言葉が多い……110
第五節　「どうも」のあいさつ多用性……112
第六節　あいさつ言葉の表現内容の「無意味性」……115
第七節　あいさつ言葉の表現形式の「定型性」……116
第八節　あいさつ言葉の短縮性、省略性、察知性……118
第九節　あいさつ言葉の「相互性」と「対称性」……120
第十節　一方通行のあいさつ言葉……121
第十一節　あいさつ言葉の待遇表現性……121
第十二節　共同経験の喚起と相互依存意識……123
第五章　あいさつと日本語教育……125
第一節　日本語教育における異文化理解への指導の重要性……125

第二節　日本文化への理解は日本語習得の初級段階から……127
第三節　自国の言語文化との比較対照からが効果的……128
第四節　学習者自身の接触体験が不可欠……129
第五節　コミュニケーションにおけるマナー教育の必要性……130
第六章　結　論……132

第二部分　詫び表現に関する中日対照研究……133

第一章　先行研究……135
第一節　先行研究……135
第二節　先行研究の問題点と本論の視点……138
第三節　詫びという言語行動とは……139
第二章　調査概要と分析方法……141
第一節　テレビドラマを選定する基準……141
第二節　使用されたテレビドラマについて……141
第三節　資料調査の方法……143
第四節　資料分析の方法……144
第三章　調査結果と分析……146
第一節　詫びの場面の比較……146
第二節　詫びの言語表現の比較……153
第三節　詫びの非言語表現についての比較……168
第四章　日本語教育への提言……171
第一節　日本語教材における詫び表現の扱い　……171
第二節　詫び表現の指導法について……173
第五章　結　論……175
第一節　まとめ……175
第二節　今後の課題……176

参考文献……179
付録１　第一部分の研究資料……186
付録２　中日において収集した各詫び表現の種類……221
付録３　中日ドラマで使用された詫び表現に関する研究資料……222

序　章

第一節　研究意義

コミュニケーションは、人間生活にとって不可欠である。それは社会の紐帯であって、それなくしては人間社会も人間の生活自体も成り立たない。そもそも人間世界は解釈を待つ自然科学の世界とは異なり、主観的世界で、常にその構成員によってすでに解釈され、理解された世界である。物事に対する特殊な理解、解釈、価値付け、対応の仕方が、それぞれの社会には常にすでに存在している。それはコミュニケーションによって媒介されて存在する文化的社会である。これは人間が意味論的存在だからである。そしてこれこそが文化と呼ばれるものではないだろうか。

文化とコミュニケーションは同じではないが、不可分である。だからどのような人間コミュニケーションも、文化の影響から逃がれられない。普遍的な文化が概念的に矛盾をはらむ限り、普遍的なコミュニケーションは不可能である。すべてのコミュニケーションは、複数の個人あるいは個人からなる集団が共通の場に立とうとする、普遍への努力の一表現でしかない。しかもこの目標に達する手段としてコミュニケーションは微弱であるが、それ以外の手段を人間は持ちあわせておらない。そこで人は、いとも自然にコミュニケーション行為によって自閉的、独我論的状況からオープンな対話的世界へと橋を渡そうとするのである。

文化とコミュニケーションの関係を理解することは、全てのコミュニケーション研究にとって、特に現在のように情報機器と情報システムの開発が世界化現象とともに加速化される時代には、それらの後を常に追いかけるような状況から逃れるためにも必須のことである（古田 1999）。

21 世紀は異文化間のコミュニケーションの時代と言われ、語学教育で

は、異文化間コミュニケーション能力の開発が要求されてきて、言語の実際運用能力を習得することに目標を置いている。円滑な異文化間コミュニケーションを営むため、伝達手段としての日本語を適切に使える文法能力が求められるが、そのコミュニケーションの背景となる社会的場面での適切な理解と行動も同時に求められている。

「あいさつ」はコミュニケーションの第一歩として、もっとも基本的、代表的なものである。日本社会、日本文化への理解を深化し、日本人とのコミュニケーションのコツを把握するために、日本の「あいさつ」を徹底的に究明し、同時に他国と比較しながらまとめなければならないと考えられる。

データの収集方法として、データの多様性と一般化可能性の両方を合わせて配慮したうえで、テレビドラマをデータの収集対象とすることが会話やコミュニケーションの研究で行われている。熊谷（2003：11）は「テレビドラマでは、場面のバリエーションが豊富なだけでなく、やりとりの形になっているので、定型的な感謝や謝罪の決まり文句以外のストラテジーも含めた言語行動の展開例が収集しやすい」と指摘している。テレビドラマの言葉は日常の言葉の特徴を反映していると同時に、日常の言葉にかなり影響を与えていると言えよう。

第二節　本書の構成

本書は主に以下の三つの部分に分けて論じる。

序章ではおもにコミュニケーション、文化、コミュニケーションと文化の関係、異文化コミュニケーション、あいさつ、あいさつの分類などの基本理論である。それから、テレビドラマをデータ収集方法にする理由について説明する。

それから日常生活における日本語あいさつ言葉の使用実態と特徴について論じる。ここでは四つのテレビドラマとビデオコーパスから、日常会話のあいさつ言葉（主に決まり文句のあいさつ言葉）を選び出し、先行研究を踏まえて13種類に分類して、使用頻度を統計してみる。あいさつ言葉の使用実態の分析を通して、日本語のあいさつ言葉の特徴を見出し、その裏に潜んでいる文化背景を明らかにしていくことにする。また、日本語教育

の視点からあいさつを中心にする異文化理解への提言をしたい。

最後に日本と中国のテレビドラマの映像資料を基に調査を行い、具体的に比較することによって、中日両国における詫びという言語行為の使用実態や類似点・相違点を明らかにしたい。まず、先行研究を踏まえて中日間の詫び表現の使用実態・特徴を考察する。それから具体的に比較することによって使用法のずれを明らかにする。つぎに使用法のずれを文化的視点から分析する。最後に中国人に対する日本語教育における詫び表現の指導について提言をする。

第三節　テーマ選定の理由

序章の第八節では、「あいさつの分類」について述べるが、第一、二部分で扱う「日常会話におけるあいさつ言葉」「中日両国の詫び表現」は広い範囲で「あいさつ」に属しているというより、むしろ「あいさつ」の代表だと言えよう。

日常生活における決まり文句のあいさつ言葉は一番よく使われ、外国人に知られ、学習者にとって、もっとも重要で、学習の初級段階でマスターすべき内容だと思われる。ところが、一見簡単で覚えれば気楽に日本人とコミュニケーションできると思う「決まり文句」であるが、つい使い間違えて、失礼になる例も少なくない。どのように正確にこれらの「あいさつ言葉」を使うには、「あいさつ言葉」の使用実態と特徴、及び裏に潜んでいる日本文化を明らかにしなければならないと考えられる。

日本人がよくお詫びをするのは世界中で知られている。日本人の詫び言葉、お詫びする時のしぐさ、詫び意識などはほかの国と比べると、独特で、非常に意味深い。例えば、飛行機の出発時間が遅れた場合の日本語と英語の謝罪に対する方向性が違う。「お急ぎのところご迷惑をおかけして申しわけございません」と“Thank you for waiting”の比較で、日本語は相手に与えた被害について言及するのに対して、英語は肯定的な面を表現するという。また、謝罪の際の釈明に対して日本人は否定的な反応をするが、アメリカ人や中国人、韓国人は事実に反しないかぎり肯定的に反応する傾向があるそうだ。それから、日本人の「反復確認型」と韓国の「1回

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

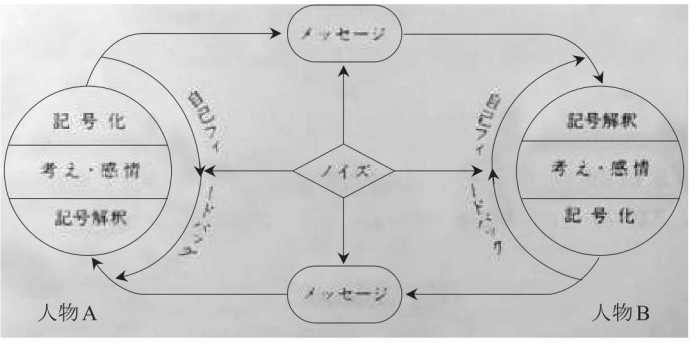
完結型」も興味深い。中国学習者はこのような比較研究を通して、日本文化と自国文化をもっと理解し、順調に異文化コミュニケーションをすることができるといい。

第四節　コミュニケーションと文化

1. コミュニケーションとは何か

コミュニケーションという用語は、社会で広く使われているものの、その定義となると、あまり明らかにされていない。『広辞苑』によると、コミュニケーションとは、「社会生活を営む人間の間に行われる視覚、感情、思考の伝達。言語・文字その他視覚聴覚に訴える各種のものを媒介する」とある。この定義によると、いうまでもなくコミュニケーションは、音声言語によるもの、文字言語によるもの、非言語によるものに分けることができる。外国語教育でよく使われるコミュニケーション能力の育成もこの三つの面から考えなければならないだろう。

コミュニケーションの過程と構成要素を分析及び説明するには、コミュニケーション・モデルがしばしば用いられる（鍋倉健悦 1998）。図序-1のように、人物Aと人物Bの間にある「ノイズ」はコミュニケーションにおいて、外国語教育において、重要視されなければならないと思う。ここで言う「ノイズ」は単なる物理的な騒音より広い意味を持つ。すなわち、円滑なコミュニケーション活動の障害となるものは、すべてがノイズである。



図序–1　対人コミュニケーション・モデル

ノイズは、外部の物理的なものと内部の生理的及び心理的なものに分けられる。文化及び社会、文化的相違によるものが内部ノイズに属すると考えられる。今後の日本語教育の場では、社会、文化的相違による「ノイズ」、つまり異文化間コミュニケーション・ギャップの原因についての分析と扱う方法は、一層重要となるだろう。

2. 文化の意味

文化についての定義は多いが、かつて1871年人類学の父と呼ばれる文化人類学者エドワード・タイラーがその代表作『原始文化』2巻の冒頭において、「文化」を「知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習その他、社会の構成員として人間によって習得された能力と習慣の複合総体」と明らかに規定されている。この定義によれば、文化は人間の生活の仕方のうち、学習によってその社会から習得した一切の部分の総称であると言えよう。

D. マツモト（David Matsumoto 2001）の定義による、「各規則におけるダイナミック（活動的）システムであり、明確なものや暗黙のうちに了解されているものがある。各集団が自らの生存のために作り上げてきたシステムで、態度、価値観、信条、規範、行動などに関連している。集団内で共有されているが、同じ集団内でもその中に存在する各単位（集団をさらに分割した下位群）ごとに異なった解釈がされている場合もある。次世代へと伝えられていき、比較的変化しにくいものではあるが、時代とともに変化する可能性もある」。

以上の文化についての概念の中のそれぞれの用語については、以下のように説明している。

①ダイナミック（活動的）について。

文化が表現している行動と文化の抽象概念の間にはある程度の食い違いが必ず存在するものである。というのも主流であるものを一般的だとみなす傾向があるからである。文化は静的な存在ではなく、常にダイナミック（活動的）で変化し続けるものであるということが分かる。

②規則システムについて。

文化とは行動・規則・態度・価値観など一つ一つのことを言っているのではなく、こういった構成概念をすべて集結したものである。

③ 集団と単位（さらに分割した下位群）について。

集団に属している個々のメンバーや、またはその集団よりもさらに大きな集団に属している個々の集団の中に、文化は多様なレベルで存在している。例えば、大企業の中にはさまざまな部門や課がある。公、または暗黙のうちに了解されているものといったシステムがあり、そのシステムが企業の組識的な文化を構成している。

④存在について。

各集団が確実に引き続き生存していくために、文化を構成している規則システムは存在する。集団内の各単位が互いに共存し、無秩序な状態（大きな混乱）が起こらないようにするために、こういった文化規則が社会秩序の枠組みを与えているのである。

⑤共有について。

同じ集団に属している個々の人が、同じ価値観、態度、信条、規範や行動を持っていることである。これは、心理的な共有を意味しているのである。

⑥態度・価値観・信条・規範・行動について。

その文化に属している「物の考え方」を共有している。こういった「物の考え方」は、個々の人間の心の中に存在しているだけではなく、個人という枠組みをこえて、社会的意識としても存在しているのである。共有している文化的価値観、規範あるがゆえに起こる日常の習慣的行動、また一般的、自動的行動のパターンに、共有している行動を見ることができる。

⑦（集団のさらに分割された下位群である）単位間における解釈の相違について。

一般的に「文化」という用語は、ある集団の中の各単位において主流となっている傾向、または平均的な傾向を表現したものである。かといって、必ずしもその集団内にあるすべての単位の各側面をすべて正確に表しているわけではない。文化内における個人個人の相違を認識することは、ステレオタイプの限界を理解する上で基本となっている。

⑧次世代へと伝えられていき、比較的変化しにくいものについて。

「一時的流行」という一時的に多くの人たちに共有される場合があるが、ここでは述べない。文化とは永続性や規則性のあるシステムであり、集団

内の単位が互いに共存する上で、重要になってくるものなのである。一つの世代から次の世代へと継承され、比較的に変化しにくいのである。

⑨時代とともに変化する可能性について。

比較的変化しにくいものである文化も、決して静的な存在ではない。文化が時代とともに変化する可能性がある。ある文化システムがその集団の主流で一般的な傾向でなくなった時、変化は避けられないものとなるのである。

以上の定義は、過去にあったほかの文化の定義に類似している点が多い。とりわけ心理的特質や特性の共有及び次世代へ文化要素を受け継ぐという点で類似している。その違いとは、個々の集団の文化について述べているだけでなく、集団の中にある各単位について述べているところである。家族の中の個人、地域社会の中の各家族、国家の中の各地方、あるいは企業内における課の中の個人、部の中の各課など、社会構造や多様なレベルの組織に存在する文化を理解することができるようになるのである。

自国の文化や母語は無意識のうちに習得するものであるので、自国の文化圏で生活している限り、自分自身では気付かない面が多い。異文化の中に身を置いてはじめて、自分の国の言語やその文化背景を再発見することになる。

しかし、現在では、「日本文化」という用語を一般に、高等文化か伝統文化の意味として捉える傾向が強い。つまり、歌舞伎、能、茶道、花道といった日本の伝統芸能や、神社、お寺、お盆といったような伝統行事や宗教、また日本の地理、歴史、経済などいわゆる日本概況といったような「高等文化」の内容だった。無論、高等文化を了解することも重要なことであるが、学習者がもっとも関心を持っていること、そして現在強く求められているのは、実のところ、高等文化の紹介や理解よりむしろ、一般文化の相互理解なのであろう。高等文化が一部の限られた人たちの世界であるのに対して、一般文化は、普通の人々の生活様式そのものであり高等文化を支える基本的文化であるため、生活に密着した事柄を重視する。例えば、朝昼晩のあいさつ、電車の中で文庫本を読み、学校で友達と話し、会社で残業し、帰宅途中で赤提灯に立ち寄り、酒の力を借りて会社や上司を批判することなど、すべてが文化なのである。異文化間の対人接触、コミュニケ

ーションにおいて問題になりやすいのは、このような日常の生活に密着している異文化なのであろう。

さらに上述の生活様式の総体としての一般文化は、精神、行動、物質の三種類の代表的要素で構成されていると考えられる。第一の精神文化は、人間の内面活動の様式とその特性である。日本社会で生まれ成長する日本人の知覚、認識、判断及び価値観、思考形式などには、他の文化と異なる日本的な精神文化の特徴を持っている。第二の行動文化は、言語行動と非言語行動に大別される。日本社会の中で、日本文化の一部としての日本語を聞く・話す・読む・書く行動は、日本の行動文化の代表と言える。非言語行動としては、顔の表情、ジェスチャー、身振りなどがある。第三の物質文化としては、衣食住が代表的なものである。一般文化のこの三大要素の中で、とくに重要なのは内面的な精神文化である。文化とコミュニケーションについて考える時、精神文化の代表的構成要素である価値観とコミュニケーションとのかかわりについて考えることが不可欠となる。

3. 文化とコミュニケーションの関係

コミュニケーションと文化は、お互いに機能し合いながら存続している。一方では、我々の話し方、話す話題、何に注目し何を無視するか、また何かについてどう考えるかといったことなどは、すべて文化の影響を受けている。言い換えれば、人間のコミュニケーションは文化によって規定されている。それは言語上の規則に限らず、どのような場面で、何についてどう話せばよいかまでが、文化によって規定されてくるからである。そして、この見えない規則に従わない人間は、コミュニケーション活動を順調に行えないだろう。言語コミュニケーションについても、非言語コミュニケーションについても同じことが言える。自国の文化では自然なコミュニケーション活動が、別の文化では誤解や思わぬ結果を招くことを考えれば、両者の関係は明らかとなるだろう。

また一方では、人間はコミュニケーション活動を通して、文化を学習している。朝起きて顔を洗い、家族とあいさつを交わし、テレビを見ながら食事をすることが文化であるため、人間は多くの人達とのコミュニケーシ

ョンによって、生活様式としての文化に身につけるのである。つまり、コミュニケーションの仕方そのものが、文化自体を形作り、存続させ、発達させたといっても過言ではない。

このように、文化とコミュニケーションが密接な関係にあり、文化の相違は、コミュニケーション様式の相違を意味することになるのである。逆に同様のことも言えよう。

第五節　異文化コミュニケーション

1. 異文化コミュニケーションの概念

コミュニケーションについての定義も多いが、ここではコミュニケーションとは「人と人の間で起こる知識、アイデイア、考え、概念、感情の交換」の定義を援用する。

異文化間コミュニケーションとは異なる文化背景を持つ人と人の間で行われる知識・アイデイア・考え・概念・感情の交換なのである。

人間は「言語的と非言語的」といった二種類の方法を用いて、意思疎通を図っている。言語行動や非言語行動の規則をきちんと理解することと、メッセージが正確に伝達され解釈されているかどうかが重要である。

外国語でコミュニケーションをする場面は、教室においても想定されるが、最終的には教室の外の異文化の相手とのコミュニケーションが想定されている。

言語行動に関与する代表的な分野だけ並べてみても、言語の文法的な知識、単語と文章の意味、文字の表記法、方言の弁別、敬語の使い分けのような言語知識、表現によって違う微妙な言語感覚、方言と形式などに対する言語意識、音声などに関する広域言語に対する感覚、ジェスチャーのような非言語行動、対話の相手と機能別場面、置かれている状況、対話関係者たちの人間関係、言語伝達メディア、話題に関する価値観、話し手と聞き手の心理、社会的倫理、伝統的習慣、宗教、思想、行動体系など、分野を特定できないほど多くの分野が言語行動に深い関係がある（李奉徳2003）。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com